九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国人日本語学習者における無標可能表現の使用状況

石, 一含
九州大学大学院地球社会統合科学府地球社会統合科学専攻

https://doi.org/10.15017/1806669

出版情報：地球社会統合科学研究. 6, pp.51-68, 2017-02-28. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

『地球社会統合科学研究』6号 51～68
Integrated Sciences for Global Society Studies
No.6 , pp. 51～68

中国人日本語学習者における無標可能表現の使用状況

石（セキ）　一含（イチカン）

1．はじめに

「可能表現」は、あるものが何かをすることができる状態にある、または、そのことをする能力があるという意味を表すモダリティ形式である。日本語の可能表現には多様な形式があり、それぞれ意味構造や使用規則がある。それに対して、中国語の可能表現の形式は大きく分けると２種類だけであるが、その意味の分類は多岐にわたる。

中国人の日本語学習者が日本語の可能表現を学習する際には、誤用が起こりやすいと言われている[1]。特に、学習者自身がなかなか誤用に気づきにくい項目として、「無標可能表現」[2]と呼ばれるものがある。「無標可能表現」とは、「（ラ）レル」や「コトガデキル」や「（アリ）ウル」のような有標識の可能表現ではなく、可能の意味を持つ自動詞を用いた無標識の可能表現のことである。例えば、「手が痛いので、どうしても上がらない」という意味を表す際、日本語の場合は可能表現ではなく、自動詞「上がる」の否定形を用いて表現する。それに対して、中国語の可能表現は常に標識のある表現を用いる。したがって、同じ意味を表す中国語の「手疼，怎么也抬不起来」では、可能補語の「抬不起来」を使用する。このように、日中両言語の可能表現の形式が対応していないため、中国人日本語学習者が日本語の可能表現を学習する際に、誤用が起こりやすいと言われている（封2005、王2012、関2013など）。

そこで本研究では、中国人日本語学習者を対象とし、「学習環境」・「日本語学習歴」・「日本語能力」の３つの視点から、習得が困難とされている「無標可能表現」の使用状況を調査する。

2．先行研究及び本研究の位置付け

2．1．日本語の無標可能表現に関する先行研究

無標識可能表現に関しては、張（1998）、龐（1999）、呂（2008、2011）、楠本（2009、2014）、姚（2008）、関（2014）、遅（2014）などの先行研究がある。

張（1998）によると、ある動作が行われた後、その動作主の意図した状態変化が実現できるかどうかを表す「結果可能表現」[3]が可能表現の一類として存在する（p. 251）。張（1998）は対照研究の立場から「結果可能表現」を分析した。その結果としては、中国語は「可能補語」で表すのに対して、日本語は明確な可能表現の形式を使用せず、有対自動詞[4]表現で表すのが主流である[5]と述べた（張1998：253）。張（1998）は日本語の無標可能表現を「結果可能表現」と名付けている[6]が、「無標可能表現」が「結果可能表現」とイコールであるかどうかはまた検討する必要がある。例えば、「明日はいい天気なので、雨は降らない」という文において、自動詞「降る」は明確な可能標識を持たず、ただ否定形だけで「降らない可能性がある」という意味を表すため、「認識可能」（呂2006：58）に分類することができる。したがって、ここでの「降る」は「無標識可能表現」と言える。しかし、「降らない」は動作主の意図の実現と関わっていないため、「結果可能表現」として認めるのは難しいのではないだろうか。

龐（1999）から分かるように、「他動詞＋ことができない」に言い換えられる場合においても、日本語母語話者は状態描写的な表現、つまり「客観的叙述とする自動詞の否定形」をとるのが普通であるが、中国語においては、「何かをしようと思っても、妨げる物があって実現できない」という場合、「人為的であっても人為的でなくても」、常に同じ他動詞を用い、主観的な可能表現で可能・不可能を表す（p. 56）。つまり、実際に言語を使う時、「中国語はよく他動詞を使って主観的な可能表現をするのに対して、日本語はよく自動詞を使って、客観的な表現をする」という日中両言語の言語習慣の違いを考えなければならない（龐1999：58）。

遅（2014）[7]は、有対／無対自動詞可能文それぞれの意味構造に対して分類を行い、それらを比較しながら、有対／無対自動詞可能文の相違という無標識可能文の内部関係を検討した。考察の結果としては、まず、共通点について、「『期待実現』型［例文（23 a 有, b 無）］、『人間の所有する能力』型［例文（24 a , b）］、『機能（特性）

発揮』型［例文（25 a , b)］は、有対・無対自動詞可能文の両方にある」（遅2014:32）と指摘している。また、有対自動詞可能文は他動性[8]を含意しているが、無対自動詞可能文は他動性を含意していないため、有対自動詞可能文は「該当する対象物の状態変化の実現のために、意図的に行為を行う」（p. 33）という「達成」の意味を表す「意図実現」型［例文（26)］を有するのに対して、無対自動詞可能文には「意図実現」型がないと主張している（遅 2014：34)。

（23）a．この問題はそう簡単に片付かない。
　　b．いつか必ず運命の人に出会うよ。
（24）a．この班長は名誉の戦傷を受け、左腕が曲がらない。
　　b．あの西洋人は、手が天井に届くよ。
（25）a．この壺は大根20本が入る。
　　b．おうちの電気で車が走る？
（26）自分は廊下を行ったりきたりしていて心を静めようとした。しかし、しばらく経っても自分の気持ちは静まらなかった。

（例文は全て遅（2014：29-31）から）

また、可能という観点からの自・他動詞の分類に関して、関（2014）は「自・他動詞が可能形と共起するかどうか」、「無標識で可能の意味を表せるかどうか」、「形態的に対応する自動詞または他動詞があるかどうか」、「自動詞か他動詞か」（p. 24）といった基準を用い、先行研究[9]をまとめた上で、新たな分類を行った（表１参照)。しかし、「動く」のような動詞は「大変疲れていて、もう動けない。」という文で意志動詞として使われているが、「ピアノを移動したいが、重くて動かない。」の場合は非情物「ピアノ」の状態描写をするため、「動く」は「レル・ラレル」と共起しない非意志動詞として使われている。表１に示したタイプ４の意志自動詞は場合によっては無意志自動詞としても使われるため、タイプ４とタイプ７には重なる点があるのではないかと考えられる。また、タイプ６において「自・他動詞の対応」はないと書いてあるが、動詞例の自動詞の「慣れる」には対応する他動詞の「慣らす」[10]があるため、動詞例については再検討の余地があると考えられる。

表１　自・他動詞分類表

グループ	タイプ	意味機能	可能形	無標識	対応	自他	動詞例
意志動詞	1		○	×	×	他	書く、話す、弾く、読む
	2		○	×	×	自	走る、眠る、いる、行く
	3		○	×	○	他	開ける、始める、見る、聞く
	4		○	×	○	自	動く、集まる、上がる
非意志動詞	5	自然現象	×	○	×	自	降る、吹く、曇る、晴れる
	6	人間の状態	×	○	×	自	分かる、慣れる、受かる
	7	結果可能	×	○	○	自	開く、始まる、上がる
	8	知覚能力	×	○	○[11]	自	見える、聞こえる

（関 2014：24-28 を参考に、筆者が作成）

2．2．中国人日本語学習者における無標可能表現の習得

中国人日本語学習者の「無標可能表現」の習得に関する調査には、小林（1996)、封（2005)、王（2012)、関（2013）などが挙げられる。

小林（1996）は、「外国語として日本語を学習する人にとって有対自動詞によって、行為の結果の状態を表現することは難しい」（p. 55）と結論づけている。この研究は、日本国内の大学に所属する留学生（中国語話者25名、韓国語話者20名、スペイン語話者５名など）を対象として行われ、場面を設定した上で、「困ったなあ、ドア（　　）」のような文を提示し、「ドアを開けない」（他動詞)、「ドアが開けられない」（他動詞可能形)、「ドアが開かない」（自動詞）という選択肢の中からどれを選択するのかという、動詞の形式についての使用状況を調査した。その結果、日本語母語話者は「アク系」を多く使っているのに対し、中国人日本語学習者は「アケラレル系」を多く選択することが分かった（小林1996：49-50)。小林（1996）は受け身、使役、可能、自発のようなボイス全体から、有対自動詞による結果・状態の表現の使用状

況を調べているが、可能ではなく有対自動詞の使用に焦点を置いているため、自動詞の可能表現については詳しく述べられていない。また、小林（1996）は「開く・開ける」しか調査文の動詞として選ばなかったため、本研究は「開く」のような有対自動詞の数を増やして考察する。

封（2005）は中国江蘇省南京市と南通市の２都市において、日本語専攻の大学３年生37名を対象とし、調査用の例文を完成させるという形式[12]を用い、「可能の意味を含む自動詞」の使用状況を調べた。封（2005：154）によると、有対自動詞の語末の形は「-u」であり、その自動詞に対応する他動詞の語末が「-eru」である場合（例「あく」（ak-u）－「あける」（ak-eru））、有対自動詞に「レル・ラレル」を共起させるとちょうどその自動詞に対応する他動詞と同形になるため[13]、動詞の形態的な特徴、つまり動詞の語末の形が学習者の習得に混乱を起こすと言われている。また、「『可能の意味を含む自動詞』は無標識の可能表現とはいえ、一概に全ての項目の習得が難しいというわけではない」（封2005：159）とも指摘している。

また、王（2012）は「属性可能」、「能力可能」、「結果可能」、「条件可能」の４つの意味的タイプごとに、無標可能表現だけではなく、可能表現の形式全般における中国人日本語学習者の使用状況を調査し、日本語母語話者との比較を行った。その結果は、「中国人学習者が無標可能表現を使用する際には日本語母語話者と大きな差がある」（王2012:11）と指摘している。しかし、王（2012）は、中国人日本語学習者と日本語母語話者の使用傾向に焦点を当て、異なる学習環境という要素を考慮したが、調査対象となる学習者の日本語能力[14]や日本語母語話者とのコミュニケーションの頻度などの要素については考慮していないため、それらの要因が調査結果に影響を与えている可能性もあるのではないだろうか。

関（2013）は、中国の大学で日本語を専攻している中国語母語話者１・２・３年生を対象に、可能表現の使用状況を探るアンケート調査を実施した。調査は２要因配置を用いた。第１の要因は調査対象者の学年であり、データを１年生、２年生、３年生の３つのグループに分けた。また、第２の要因は可能標識の有無であり、データを有標識と無標識の２つのグループに分けた。調査は有標識可能表現の４文（眠る、走る、書く、話す）と無標識可能表現の４文（分かる、慣れる、吹く、降る）からなっていた。４文ずつになっている有標可能文と無標可能文の中で、それぞれについて３文が正しければ、その用法が習得されていると判断した。その結果としては、「１、２と３年生の学生にとって有標識可能表現は習得されやすく、無標識可能表現は習得されにくい」ということが分かった（関 2013：27）。無標可能表現に関しては、それぞれの学年における平均正用数の間に有意差が見られ、さらに、「１年生＜２年生＜３年生のように学年を追って上達していく」（p. 24）ことが明らかになった。しかし、習得が進んでいるとはいえ、３年生になっても無標可能の調査文である４文中、２文程度しか正解できていなかったため、３年生においても十分に習得していないと判断できる（関 2013:23-24）。関（2013）は、有標と無標可能表現の使用状況の違いに重点を置いたため、無標可能表現の調査文において、人間状態を表す無対自動詞の「分かる・慣れる」と、自然現象を表す無対自動詞の「吹く・降る」の２種類のみを調査動詞として選んでおり、「入る・開く・見える」のような有対自動詞の無標識可能表現の使用状況には触れていない。

2．3．本研究の位置付けと研究課題

本節で前述した先行研究の調査対象や問題点などをまとめ、本研究の位置付けを論じる。まずは調査形式、及び調査対象とする動詞の違いについて表２にまとめる。

表２　先行研究・本研究の比較（調査形式・動詞）

	調査形式	動　詞					
		有標	無標	有対	無対	自	他
小林（1996）	選択問題（３択）	△	○	○	×	○	△
封（2005）	穴埋め問題	△	○	○	△	○	△
王（2012）	選択問題（６択）	△	○	○	△	○	△
関（2013）	選択問題（４択）	○	○	×	○	△	△
本研究	選択問題（４択）	△	○	○	○	○	△

○：調査対象とする動詞（調査の焦点になる）
△：調査対象者の使用状況を解明するために、実際の調査で使用された調査対象以外の動詞
×：完全に触れていない動詞

表２から分かるように、封（2005）は穴埋め問題の調査形式を用いたのに対して、小林（1996）・王（2012）・関（2013）は選択問題の形式で調査を行った。封（2005）は、先に中国語の文を提示し、調査対象者にその中国語の日本語訳文を補充させるという形を用いたが、先に提示された中国語は調査対象者の回答を左右する恐れがあり、また、穴埋め問題はデータ統計が難しいという面もあるため、本研究は封（2005）以外の先行研究と同様に選択問題の形式を使用する。そして、小林（1996）の選択問題で用いられた選択肢は「自動詞」・「他動詞」・「他動詞可能形」の３つしかなく、「自動詞可能形」には触れていない。また、王（2012）は有標識の可能形式を「レル・ラレル」・「（こと）ができる」まで細かく分けて６つの選択肢を用意したが、調査対象の「無標可能表現」の使用傾向を分析する際に、逆に結果がはっきり見えなくなる可能性があるのではないかと考えられる。関（2013）は「自動詞」・「自動詞可能形」・「他動詞可能形」・「自由記述」の４つの選択肢を作成した。「無標可能表現」の使用傾向が最も現れやすいのは関（2013）の調査方法だと思うため、本研究では関（2013）の調査形式に従って四肢択一のテスト問題を作成し調査する。

また、表２により、先行研究が調査対象とする動詞には異同があることが明らかになった。小林（1996）・封（2005）・王（2012）は「結果可能表現」つまり有対自動詞の無標可能表現に注目しているが、それに対して、関（2013）は無対自動詞の可能表現に焦点を置き、有標と無標の面から学習者の使用状況を比較した。さらに、有対自動詞を対象とした小林（1996）・封（2005）・王（2012）の３つの先行研究においても違いがある。封（2005）と王（2010）は無対自動詞について言及しているが、王（2012）の調査では無対自動詞は１つしか触れられておらず（「受かる」）、また、小林（1996）においては無対自動詞について全く触れていないのである。

さらに、この４つの先行研究はいずれも中国人日本語学習者の使用状況を調べたものであるが、王（2012）を除き、小林（1996）・封（2005）・関（2013）は第二言語環境と外国語環境のどちらかにいる学習者しか対象にしていない。王（2012）は学習環境の違いによる使用傾向の違いを考察したが、調査対象者を設定する際に学習者の日本語能力の違いや学習歴の違いなどの要素をコントロールしておらず、このことが実際の調査結果に影響している恐れもあると考えられる。また、関（2013）は学習歴の面から学習者の使用状況を調べたが、調査対象は「無標可能表現」ではなく、「無対動詞の可能表現」に焦点が置かれている。

本研究は先行研究の補充として、「無標可能表現」の習得に焦点を当て、「有対自動詞」はもちろん、「無対自動詞」の無標可能表現も調査対象とし、以下の３つの課題をめぐって、中国語を母語とする日本語学習者における「無標可能表現」の使用状況を考察する。

①「日本語無標可能表現」の使用状況は、学習環境の違い（日本での長期滞在歴の有無）によって異なるか。
②「日本語無標可能表現」の使用状況は、日本語の学習年数の長さ（学習歴）によって異なるか。
③「日本語無標可能表現」の使用状況は、日本語学習者の日本語レベルによって異なるか。

３．調査

３．１．調査方法

関（2014）の分類（p.52の表１参照）に基づき、無標識可能表現になる「タイプ５」・「タイプ６」・「タイプ７」・「タイプ８」から15個の自動詞（p.55の表３参照）を選び、先行研究で用いられた例文、調査文などを参照し、「有標・無標可能表現についての調査」というテスト問題（＜資料＞参照）を作成した[15]。なお、テストは４つの選択肢から正しいと思うものを１つ選んでもらう形式のものである。調査対象者には時間制限なしで回答してもらい、また、各質問の日本語を中国語に訳してもらった。収集したデータを日本滞在歴別の２つのグループ（「滞在歴なし（１年未満）」・「滞在歴あり（１年以上）」）、日本語学習歴別の３つのグループ（「２年」・「３年」・「４年以上」）、日本語レベル別の３つのグループ（「１級」・「２級」・「３級以下」[16]）に分けた。また、それぞれのグループごとに、テストの各設問の回答総数に対して無標可能表現を選択した割合を算出し、日本語母語話者の選択率と比較することによって、調査対象者の「無標可能表現」の使用状況を考察する。さらに、分析の際に、各研究課題に対し、次のようにデータを分けて比較した。

課題①に対する分析方法：日本語能力試験１級を取得した学習者50名を「上級者」とし、「滞在歴あり」（26名）・「滞在歴なし」（24名）という２つのグループに分け、無標可能表現の使用状況を分析した。

課題②に対する分析方法：学習環境からの影響を考慮し、滞在歴なしの75名の学習者を「学習歴２年」（30名）・「学習歴３年」（28名）・「学習歴４年以上」（17名）に分けて結果を分析した。

課題③に対する分析方法：学習環境からの影響を考慮し、滞在歴なしの75名（日本語能力試験レベルが不明の

表３　本調査のテスト問題に選ばれた自動詞

	意味機能[17]	設問に選ばれた自動詞
タイプ５	自然現象	吹く（問 13）・降る（問 14）・咲く（問 15）
タイプ６	人間の状態	分かる（問７）・慣れる（問８）・痩せる（問９）・受かる（問 10）
タイプ７	結果可能	出る（問１）・入る（問２）・開く（問３）・治る（問４）・つく（問５）・動く（問６）
タイプ８	知覚能力	見える（問 11）・聞こえる（問 12）

９名を除き、有効回答数は66名である）の調査対象者を「１級」（24名）・「２級」（34名）・「３級以下」（８名）に分類し、無標可能表現の使用状況を考察した。

3．2．調査対象者

2015年７月に中国のS大学において、日本語専攻の２年生・３年生合わせて60名（回答漏れの２名を除くと、実際に収集したデータ数は58名である）を対象として、調査を行った。対象者は全員日本滞在経験がなく、日本語を学び始めたのは大学に入学してからである。同年の10月には、日本のQ大学・T大学に所属する大学院生25名（回答漏れの２名を除くと、実際に収集したデータ数は23名である）、中国のS大学・H大学に所属する大学院生20名（日本滞在歴なしの学習者は17名・日本滞在歴ありの学習者は３名）の中国人日本語学習者を対象として調査を行った。調査対象者の総数は105名であり、回答漏れの４人を除くと、有効データ数は101名である。また、ベースラインデータとして日本語母語話者25名にも同様の調査に協力してもらった。

以下の表４．１から表４．３は調査対象者の人数を日本長期滞在歴の有無（滞在期間１年を満たしているかどうか）、学習歴（年数）、日本語レベルについてまとめたもので、データは全て調査時点でのものである。

表４．１　日本滞在歴別の調査対象者数

日本滞在歴	人　数	合　計
無	75	101
有	26	

表４．２　日本語学習歴別の調査対象者数

日本語学習歴	人　数	合　計
２年	30	101
３年	28	
４年	17	
５年以上	26	

表４．３　日本語能力別の調査対象者数

日本語レベル	人　数	合　計
１級	24+26[18]	92
２級	34	
３級以下	8	
不明	9	9

4．結果と考察

表３（p.55）のタイプごとに、それぞれ学習環境別、日本語学習歴別、日本語能力別の順に結果を示し考察していく。

4．1．タイプ５

4．1．1．学習環境別

タイプ５は「自然現象を表すもので、可能形とは共起しないが、可能の意味を帯びている」（関2014：27）。日本滞在歴別の使用状況においては、同じ１級レベルの上級学習者であっても、滞在歴がある学習者は滞在歴のない学習者より自動詞可能表現の選択率が高く、日本語母語話者とほぼ同程度であった（p.55の図１参照）。さらに、全般的に見ると、上級学習者（滞在歴を問わず）の無標識可能自動詞の選択率が４つのタイプの中で最も高いため、タイプ５の自動詞の無標可能表現は上級日本語学習者にとって最も習得しやすいと言えるであろう。

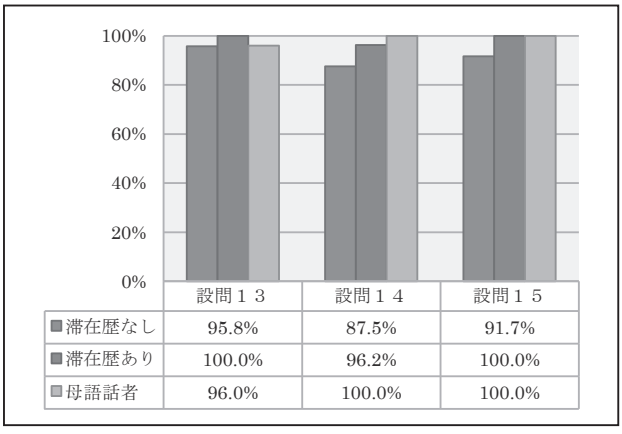
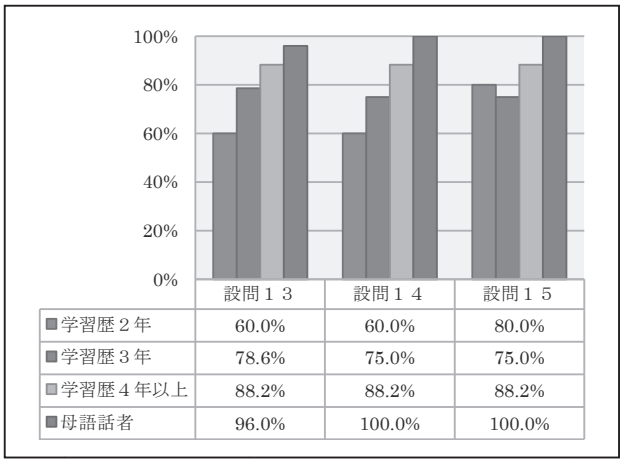


図１　自動詞タイプ５の無標可能表現の選択率
（日本滞在歴別）

4．1．2．日本語学習歴別

図２の日本語学習歴を見れば、自動詞可能表現は外国語環境における日本語の学習が進むにつれて自然に習得するのではないかと推測できる。

さらに、学習年数が２年しかない学習者においても、無標可能表現の選択率は60%以上で、他の自動詞タイプと比べると無標可能表現の習得率が非常に高いことが分かった。その原因の１つとしては､学習者が｢吹ける｣｢降れる｣｢咲ける｣のような自動詞「吹く」｢降る」｢咲く」の可能形を聞いたり読んだりすることがない、つまり、教科書や教師などから「吹ける」｢降れる」｢咲ける」のようなインプットがないことが、学習者の使用傾向に影響する一因ではないだろうかと考えられる。

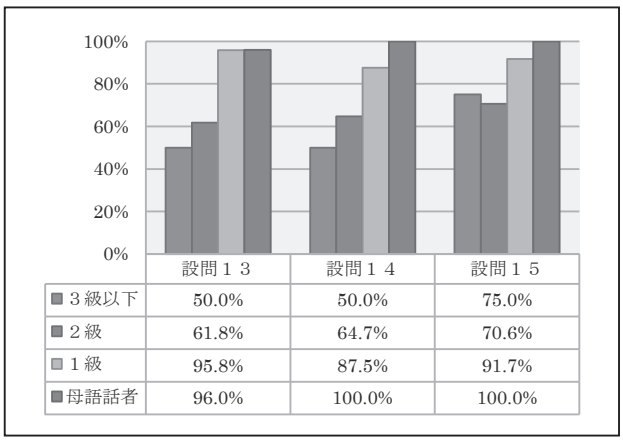


	設問１３	設問１４	設問１５
学習歴２年	60.0%	60.0%	80.0%
学習歴３年	78.6%	75.0%	75.0%
学習歴４年以上	88.2%	88.2%	88.2%
母語話者	96.0%	100.0%	100.0%

図２　自動詞タイプ５の無標可能表現の選択率
（日本語学習歴別）

4．1．3．日本語能力別

また、図３より、自然現象を表そうとする場合、「３級以下」と「２級」の学習者の使用状況には大きな違いがないが、「１級」の学習者の使用傾向と比べて見ると相違があることが読み取れる。上級レベル（「１級」）の日本語学習者における使用傾向は、日本語母語話者の使用傾向に最も近いことも分かった。学習者は外国語環境にいると言っても、日本語能力が上がるほど、タイプ５の自動詞の無標可能表現の習熟度も上がってくると考えられる。



	設問１３	設問１４	設問１５
３級以下	50.0%	50.0%	75.0%
２級	61.8%	64.7%	70.6%
１級	95.8%	87.5%	91.7%
母語話者	96.0%	100.0%	100.0%

図３　自動詞タイプ５の無標可能表現の選択率
（日本語能力別）

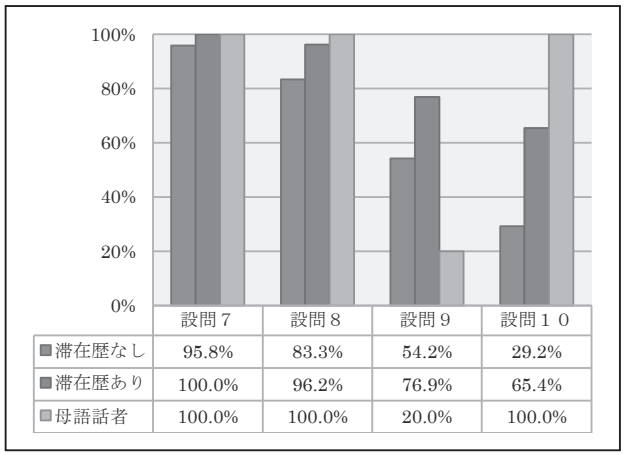
4．2．タイプ６

4．2．1．　学習環境別

タイプ６は「人間の状態を表すもので、可能形とは共起しないが、可能の意味を帯びている」（関2014：27）。本研究は「分かる」･「慣れる」･「痩せる」･「受かる」の４つの自動詞を挙げて調査を行った。設問９の自動詞｢痩せる｣は先行研究でも例文として挙げられた[19]。しかし、本調査において、日本語母語話者の無標識可能自動詞の選択率は20%と非常に低かった。その一方、中国人日本語学習者の場合は、学習歴や日本滞在歴などを問わず、半数程度の調査対象者が「痩せる」を選択しており、最も多かったのは日本滞在歴ありの上級学習者で、その数は76.9%に達している。本調査では、日本語母語話者における無標可能自動詞の選択率が高い動詞のみを調査対象とするため、設問９の自動詞「痩せる」は分析の対象から除外するものとする。

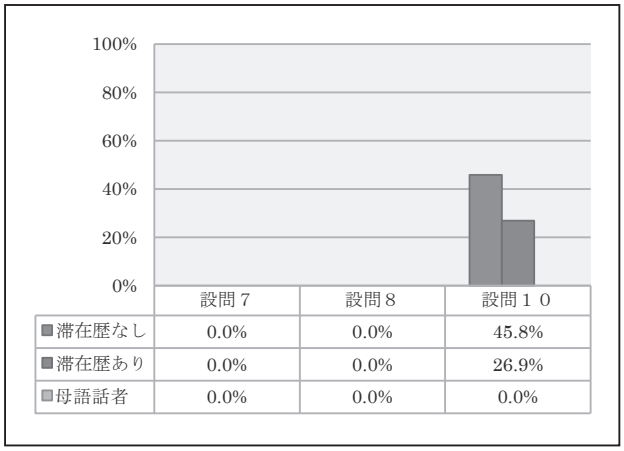
日本滞在歴別をみると、まず、設問７（｢分かる｣）と設問８（｢慣れる｣）において、日本滞在歴がある上級学習者の使用傾向は、滞在歴なしの上級学習者よりも日本語母語話者の使用傾向に近いが、両方とも高い習熟度であると言える（図４参照）。

また、設問10（｢受かる｣）の結果においては、調査対象者である日本語母語話者全員が可能自動詞「受からない」を選択している。それに対して、中国人調査対象者の場合、滞在歴ありの学習者は滞在歴なしの学習者より「受からない」の選択率が高いが、どちらも日本語母語話者の使用傾向とは大きな違いがある（図４参照）。



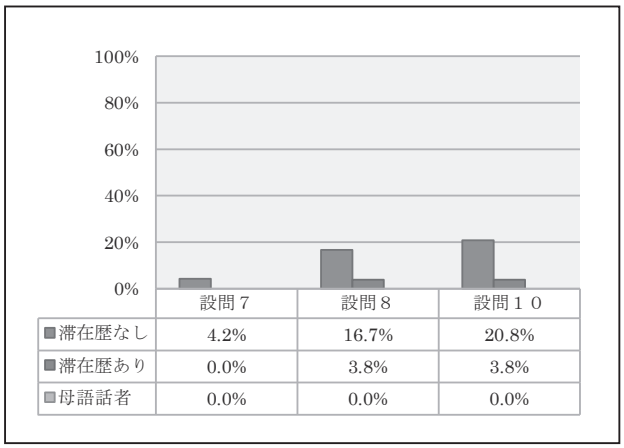
	設問７	設問８	設問９	設問１０
滞在歴なし	95.8%	83.3%	54.2%	29.2%
滞在歴あり	100.0%	96.2%	76.9%	65.4%
母語話者	100.0%	100.0%	20.0%	100.0%

図４　自動詞タイプ６の無標可能表現の選択率
（日本滞在歴別）



	設問７	設問８	設問１０
滞在歴なし	0.0%	0.0%	45.8%
滞在歴あり	0.0%	0.0%	26.9%
母語話者	0.0%	0.0%	0.0%

図５　自動詞タイプ６の他動詞可能形の選択率
（日本滞在歴別）



	設問７	設問８	設問１０
滞在歴なし	4.2%	16.7%	20.8%
滞在歴あり	0.0%	3.8%	3.8%
母語話者	0.0%	0.0%	0.0%

図６　自動詞タイプ６の自動詞可能形の選択率
（日本滞在歴別）

そして、中国人日本語学習者、特に滞在歴なしの学習者は他動詞可能形「受けられない」を多用することが分かった（図５参照）。（「受けられない」の選択率は「滞在歴なし」45.8%で「滞在歴あり」26.9%である。） さらに、滞在歴なしの学習者よりも滞在歴ありの学習者の方が自動詞可能形（「受かられない」）の選択率は低いが、どちらも日本語母語話者の０％の選択率とは差があることが分かった（図６参照）。

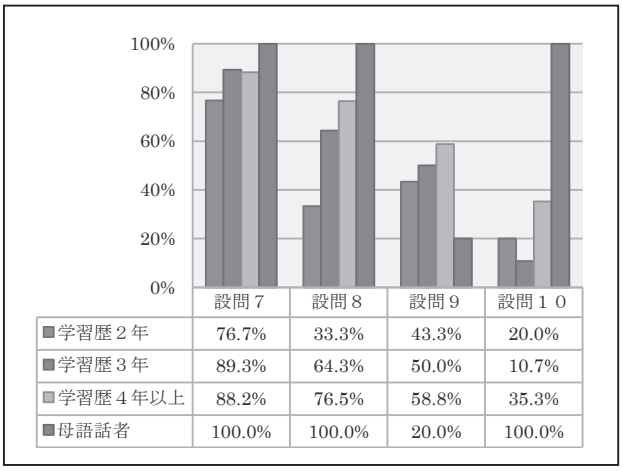
4. 2. 2. 日本語学習歴別

図７が示しているように、調査対象者の学習歴に関わらず、設問７（「分かる」）の無標可能自動詞「分からない」の回答率は日本語母語話者の100%に近く、非常に高いことが明らかになった。

それに対して、設問10（「受かる」）においては、「受からない」の選択率は中国人調査対象者と日本語母語話者とに大きな違いが見られる。多くの中国人日本語学習者は「受ける」が「受かる」に対応する他動詞だと勘違いしていたため、他動詞の可能形「受けられない」を選んだということが調査対象者とのインタビューから分かった（図８参照）。

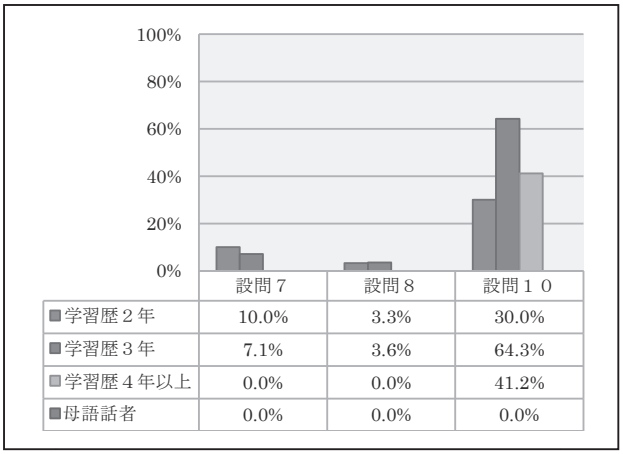
早津（1987）によると、「受かる」と「受ける」は形態的に対応自他動詞のように見えるが、統語的な対応関係は成り立たないため、「受かる」は対応する他動詞のない自動詞である（p. 81）。したがって、学習者が無標可能表現を学習する際に、自他動詞に関する知識が不足していることも無標可能表現の習得に支障を与えるのだと予測できる。

また、設問８（「慣れる」）の場合、中国人日本語学習者と日本語母語話者の使用傾向の間には違いがあるものの、日本語学習者の学習歴が長くなるほど使用傾向は日本語母語話者の使用傾向に近くなっている。このことから、学習歴が長くなるほど上達していくと言えるであろう。調査によると、低学年の学習者は「慣れられない」（図９）という自動詞可能形を選ぶ者が多いが、学年が上がるにつれて自動詞可能形のかわりに自動詞の「慣れない」（図７）を選ぶ学習者が増えてくることが分かった。



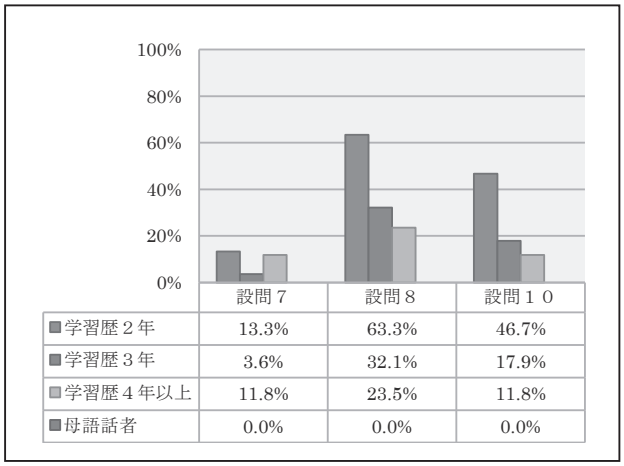
	設問７	設問８	設問９	設問１０
学習歴２年	76.7%	33.3%	43.3%	20.0%
学習歴３年	89.3%	64.3%	50.0%	10.7%
学習歴４年以上	88.2%	76.5%	58.8%	35.3%
母語話者	100.0%	100.0%	20.0%	100.0%

図７　自動詞タイプ６の無標可能表現の選択率
（日本語学習歴別）



	設問７	設問８	設問１０
学習歴２年	10.0%	3.3%	30.0%
学習歴３年	7.1%	3.6%	64.3%
学習歴４年以上	0.0%	0.0%	41.2%
母語話者	0.0%	0.0%	0.0%

図８　自動詞タイプ６の他動詞可能形の選択率
（日本語学習歴別）



	設問７	設問８	設問１０
学習歴２年	13.3%	63.3%	46.7%
学習歴３年	3.6%	32.1%	17.9%
学習歴４年以上	11.8%	23.5%	11.8%
母語話者	0.0%	0.0%	0.0%

図９　自動詞タイプ６の自動詞可能形の選択率（日本語学習歴別）

これは、学習者が初めに教科書や教師などから、「慣れる」は「レル・ラレル」と共起しないという明示的な知識を受け取っていないことにより誤用を引き起こし、学習年数が増えるとともに、学習者自身が「慣れられない」という形のインプットに触れなかったため、自身でも使用しないようになったのではないかと考えられる。

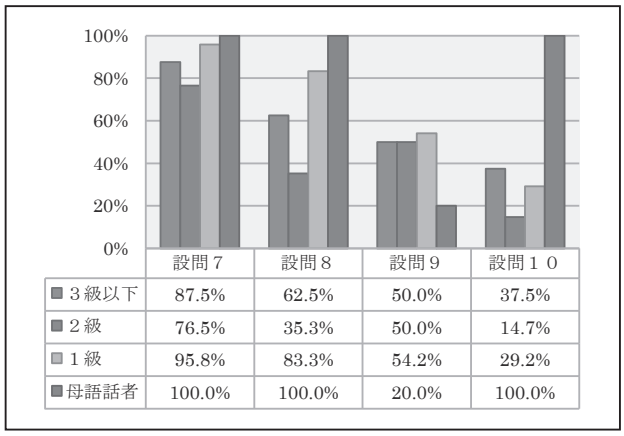
4. 2. 3. 日本語能力別

学習者の日本語能力別に見た結果、「分かる・慣れる・受かる」の無標可能表現の選択率に関しては、１級レベルと３級以下レベルの学習者が２級の学習者よりも高いことが分かった。すなわち、中級後期の時期に学習者の「可能表現・自他動詞」の使い方に対しての理解力が一時的に衰え、上級になると再び３級時のレベルに戻るといった様子を表していることが明らかとなった（図10参照）。このようなU字型の曲線を描く言語発達の現象は、「U字型発達」と言われている（高見澤他2004：196）。

設問７と設問８の無標可能自動詞の選択率は、いずれも３級レベルグループより１級レベルグループの方が高いが、設問10において１級レベルのグループは３級レベルのグループの水準には達しておらず、そこには約８％の差がある（図10参照）。総体的な日本語能力のレベルが高くなっても、「受かる」の無標可能表現の習得は本研究の結果で上達するどころか後退する傾向があることが明らかになった。しかし、これは一時的な現象であるかそれとも永久的な化石化であるかについては、今後検討する必要がある。

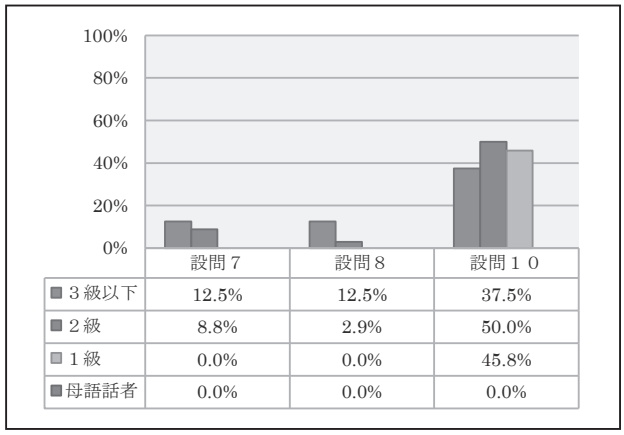
また、図11に示しているように、設問７（「分かる」）と設問８（「慣れる」）に対しての他動詞可能形の選択率は低いが、設問10（「受かる」）に対しては上級者さえも半数程度は他動詞「受ける」の可能形を選んだ。

さらに、図12に示しているように、２級レベルの対象者グループは他の対象者グループよりも自動詞可能形を多用する傾向が見られた。特に、設問８（「慣れる」）において、２級レベルの対象者グループの「慣れられない」の選択率は１級レベルと３級以下のレベルの対象者よりも高く、その数値は61.8%に達している。



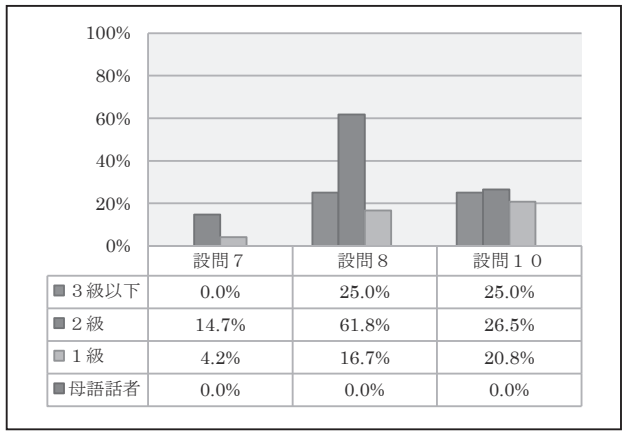
	設問７	設問８	設問９	設問１０
３級以下	87.5%	62.5%	50.0%	37.5%
２級	76.5%	35.3%	50.0%	14.7%
１級	95.8%	83.3%	54.2%	29.2%
母語話者	100.0%	100.0%	20.0%	100.0%

図10　自動詞タイプ６の無標可能表現の選択率（日本語能力別）



	設問７	設問８	設問１０
３級以下	12.5%	12.5%	37.5%
２級	8.8%	2.9%	50.0%
１級	0.0%	0.0%	45.8%
母語話者	0.0%	0.0%	0.0%

図11　自動詞タイプ６の他動詞可能形の選択率（日本語能力別）



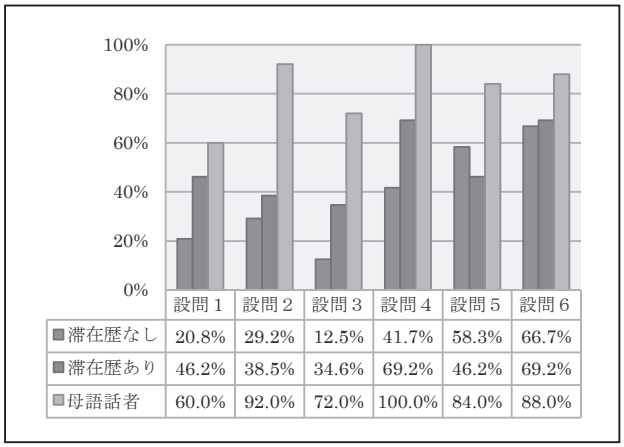
	設問７	設問８	設問１０
３級以下	0.0%	25.0%	25.0%
２級	14.7%	61.8%	26.5%
１級	4.2%	16.7%	20.8%
母語話者	0.0%	0.0%	0.0%

図12　自動詞タイプ６の自動詞可能形の選択率（日本語能力別）

4．3．タイプ7

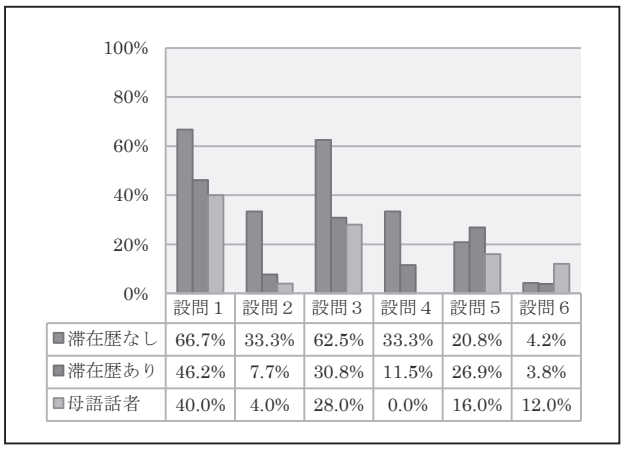
4．3．1．学習環境別

タイプ7は「状態変化が動作主の思い通りに実現できるかどうか」（関2014：28）を表し、「結果可能表現」と呼ばれることもある。これらの動詞に対する中国語訳には有標可能表現が使われがちであるため、中国人日本語学習者にとっては間違いやすいものだと言われている[20]。学習環境別に見ると、日本滞在歴ありの学習者は滞在歴のない学習者よりも無標可能表現の回答率が高いが、日本語母語話者の使用傾向とは大きな違いがあることが明らかになった（図13参照）。それは、日本語母語話者が無標可能表現を多用するのに対して、中国人日本語学習者は可能形を多く使うということである。さらに、滞在歴ありの学習者における「自動詞可能形」の選択率が「他動詞可能形」の選択率より高いのは4問で、タイプ7の全設問数（5[21]）の半分以上を占めている。それに対して、滞在歴なしの学習者における「他動詞可能形」の選択率が「自動詞可能形」の選択率より高いのは3問で、タイプ7の全設問数（5[22]）の半分以上を占めている（図14・15参照）。この結果から、可能形といっても、第二言語環境における中国人日本語学習者は自動詞可能形を好むのに対し、外国語環境の学習者は他動詞可能形を好む傾向[23]があるのではないかと考えられる。これは、第二言語環境にいる学習者は日本語母語話者と接触する機会が多く、外国語環境にいる学習者よりインプットの量も多く、質もいいため、周りの日本語母語話者からの影響を受け、自動詞を使う意識が高まってきたのではないだろうか。しかし、どのような自動詞が可能形になるか、どのような自動詞が可能形にならないかという知識は持っていないため、無意志自動詞に可能助動詞の「レル・ラレル」を共起させるといった過剰般化[24]を起こしてしまったのではないかと考えられる。



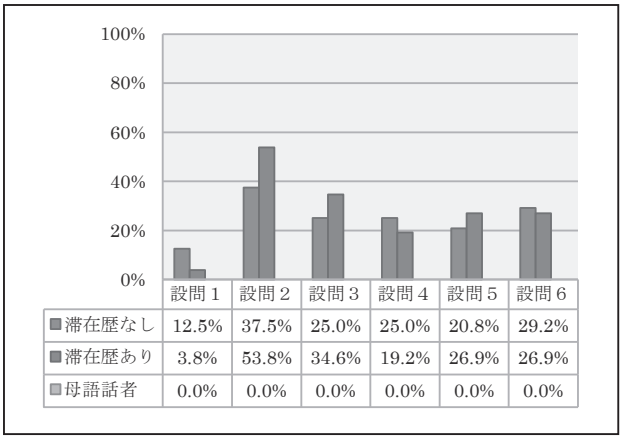
	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6
滞在歴なし	20.8%	29.2%	12.5%	41.7%	58.3%	66.7%
滞在歴あり	46.2%	38.5%	34.6%	69.2%	46.2%	69.2%
母語話者	60.0%	92.0%	72.0%	100.0%	84.0%	88.0%

図13　自動詞タイプ7の無標可能表現の選択率（日本滞在歴別）



	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6
滞在歴なし	66.7%	33.3%	62.5%	33.3%	20.8%	4.2%
滞在歴あり	46.2%	7.7%	30.8%	11.5%	26.9%	3.8%
母語話者	40.0%	4.0%	28.0%	0.0%	16.0%	12.0%

図14　自動詞タイプ7の他動詞可能形の選択率（日本滞在歴別）



	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6
滞在歴なし	12.5%	37.5%	25.0%	25.0%	20.8%	29.2%
滞在歴あり	3.8%	53.8%	34.6%	19.2%	26.9%	26.9%
母語話者	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

図15　自動詞タイプ7の自動詞可能形の選択率（日本滞在歴別）

4．3．2．日本語学習歴別

タイプ7の自動詞に関して、すべての日本語母語話者が無標可能自動詞を使うというわけではないものの、可能の意味を表そうとする場合には、可能形より無標可能表現を圧倒的に多用することが明らかになった（図16･17参照）。

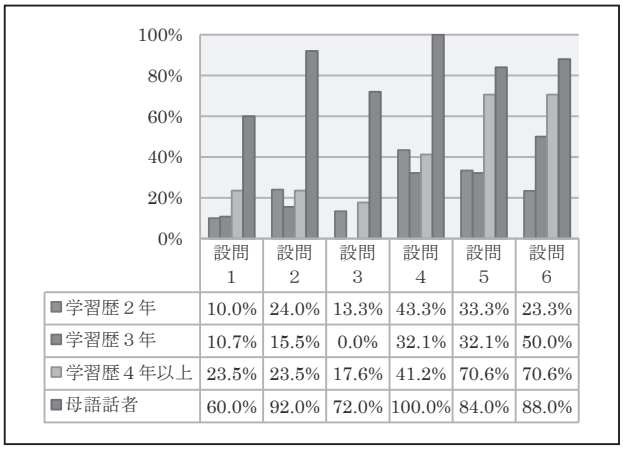
また、図16より分かるように、いずれの学習歴グループも日本語母語話者の使用傾向とはかなり異なっているため、外国語環境における日本語学習者にとっては非常に間違いやすいタイプだと言えるであろう。

3つの学習歴グループの中で、3年生グループの対象者の無標可能自動詞の選択率は他の調査対象者グループよりも低かった（図16参照）。例えば、設問3の場合、無標可能自動詞の「開かない」の回答率は0％であるが、その一方で、他動詞可能形の「開けられない」は46.4%であり、「開けない」（自動詞可能形の否定・他動詞原形の否定）の回答率は53.6%であることが図16・17・18から読み取れる。

設問5と設問6を見ると、学習歴4年以上の対象者グループは2年・3年の対象者グループよりも無標可能自

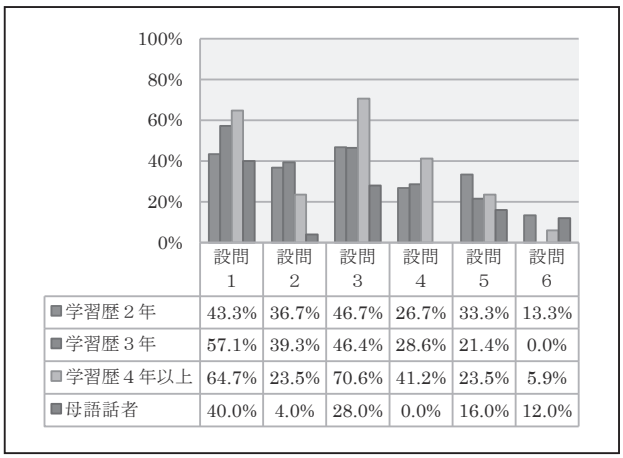
動詞の回答率が高いが、設問２・設問３・設問４のように学習歴２年の学習者とはほぼ変わらないこともある（図16参照）。

また、学習歴４年以上の学習者は２年・３年の学習者よりも「出られない・治れない」のような自動詞可能形の選択率は低いが、母語話者の０％とは随分異なっているということが図18から分かった。



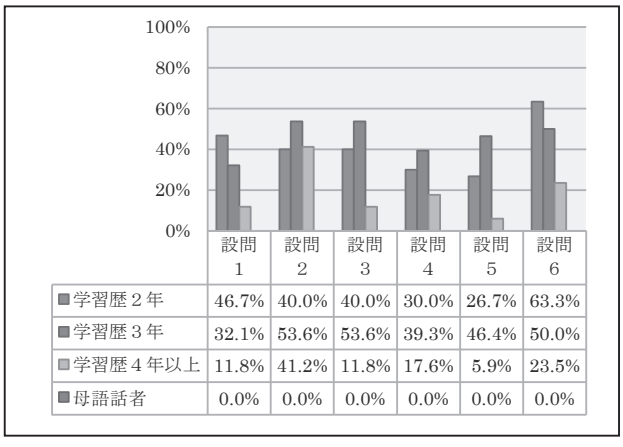
	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6
学習歴２年	10.0%	24.0%	13.3%	43.3%	33.3%	23.3%
学習歴３年	10.7%	15.5%	0.0%	32.1%	32.1%	50.0%
学習歴４年以上	23.5%	23.5%	17.6%	41.2%	70.6%	70.6%
母語話者	60.0%	92.0%	72.0%	100.0%	84.0%	88.0%

図16　自動詞タイプ７の無標可能表現の選択率
（日本語学習歴別）



	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6
学習歴２年	43.3%	36.7%	46.7%	26.7%	33.3%	13.3%
学習歴３年	57.1%	39.3%	46.4%	28.6%	21.4%	0.0%
学習歴４年以上	64.7%	23.5%	70.6%	41.2%	23.5%	5.9%
母語話者	40.0%	4.0%	28.0%	0.0%	16.0%	12.0%

図17　自動詞タイプ７の他動詞可能形の選択率
（日本語学習歴別）



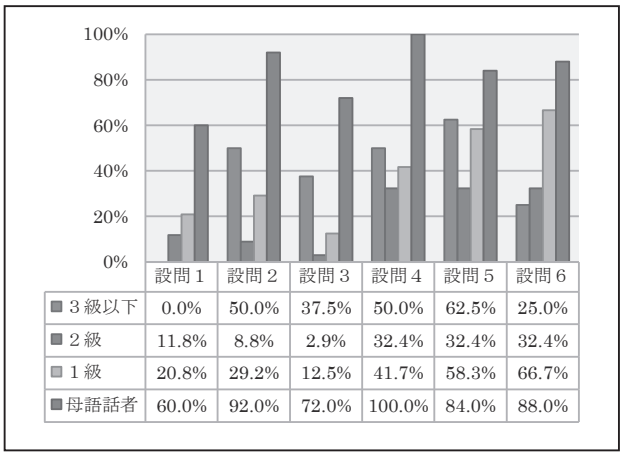
	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6
学習歴２年	46.7%	40.0%	40.0%	30.0%	26.7%	63.3%
学習歴３年	32.1%	53.6%	53.6%	39.3%	46.4%	50.0%
学習歴４年以上	11.8%	41.2%	11.8%	17.6%	5.9%	23.5%
母語話者	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

図18　自動詞タイプ７の自動詞可能形の選択率
（日本語学習歴別）

4．3．3．日本語能力別

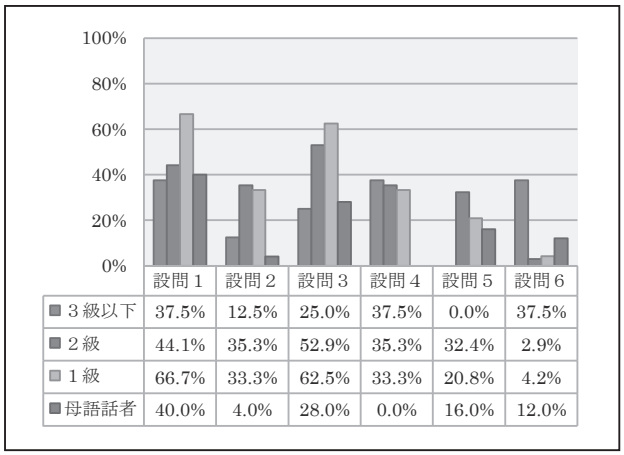
まず、無標と有標のどちらの可能表現を使うかに関して、日本語能力に関わらず、調査対象者の使用傾向が日本語母語話者の使用傾向とは大きな違いがあることが図19により分かった。中国人日本語学習者は「他動詞可能形・自動詞可能形」を多用する（図20・21参照）が、日本語母語話者は「無標可能自動詞」の方を多く使用する（図19参照）。そして、設問１（「出る」）と設問６（「動く」）の場合は、日本語能力が上がるほど「無標可能自動詞」を選ぶ傾向があるということがデータから読み取れるが、設問２（「入る」）・設問３（「開く」）・設問４（「治る」）・設問５（「決心がつく」）の場合は、その結果がU字型のようになっている。つまり、「無標可能表現」の選択率は日本語のレベルが３級から２級に上がると一時的に下がってくるが、１級になると再び上がっているのである。しかし、上級になり「無標可能自動詞」の使用率が改めて上がってくると言っても、初級レベルの使用率には及ばないこともある。例えば、設問２（「入る」）において、「３級以下」グループの選択率は50%であり、「２級」グループになると8.8%に下がり、「１級」グループになると、その選択率は29.2%に上がっている。しかし、「３級以下」の50%には及ばない。

また、「自動詞可能形」の使用について、本調査から分かるように、日本語母語話者の「自動詞可能形」の回答率が０％であるのに対して、中国人日本語学習者、特に初級・中級の学習者の場合は「自動詞可能形」を多く用いる傾向が見られる（図21参照）。例えば、設問１「出られない」の回答率は「３級以下」62.5%、「２級」44.1%、「１級」12.5%、「母語話者」０%となっている。また、設問６「動けない」の回答率は「３級以下」37.5%、「２級」64.7%、「１級」29.2%、「母語話者」０%である。



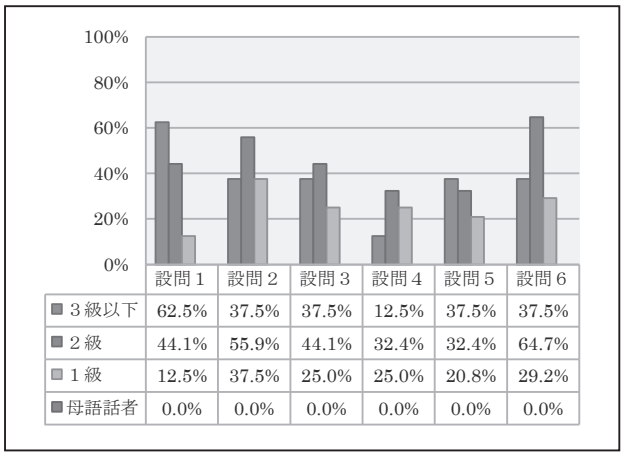
	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6
３級以下	0.0%	50.0%	37.5%	50.0%	62.5%	25.0%
２級	11.8%	8.8%	2.9%	32.4%	32.4%	32.4%
１級	20.8%	29.2%	12.5%	41.7%	58.3%	66.7%
母語話者	60.0%	92.0%	72.0%	100.0%	84.0%	88.0%

図19　自動詞タイプ７の無標可能表現の選択率
（日本語能力別）



	設問１	設問２	設問３	設問４	設問５	設問６
３級以下	37.5%	12.5%	25.0%	37.5%	0.0%	37.5%
２級	44.1%	35.3%	52.9%	35.3%	32.4%	2.9%
１級	66.7%	33.3%	62.5%	33.3%	20.8%	4.2%
母語話者	40.0%	4.0%	28.0%	0.0%	16.0%	12.0%

図20　自動詞タイプ７の他動詞可能形の選択率
（日本語能力別）



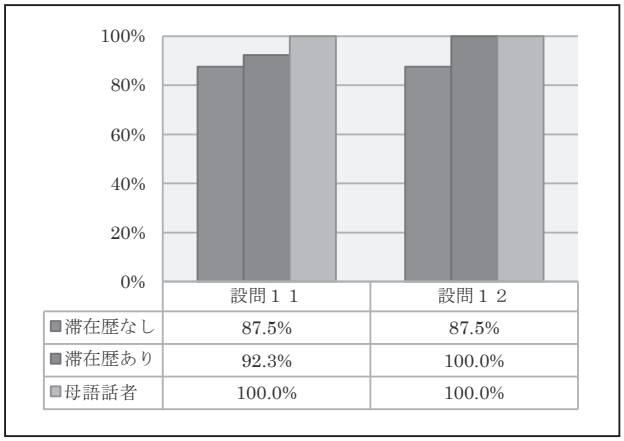
	設問１	設問２	設問３	設問４	設問５	設問６
３級以下	62.5%	37.5%	37.5%	12.5%	37.5%	37.5%
２級	44.1%	55.9%	44.1%	32.4%	32.4%	64.7%
１級	12.5%	37.5%	25.0%	25.0%	20.8%	29.2%
母語話者	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

図21　自動詞タイプ７の自動詞可能形の選択率
（日本語能力別）

４．４．タイプ８

４．４．１．学習環境別

タイプ８は「目に見える」「耳が聞こえる」のように、「人間の知覚能力」（関2014：28）を表すものである。図22に示しているように、上級レベルの学習者は日本滞在歴を問わず、いずれも日本語母語話者の使用傾向に非常に近いため、上級学習者にとってはタイプ４と同じように、タイプ８に属する自動詞の無標可能表現も習得しやすいと言えるであろう。



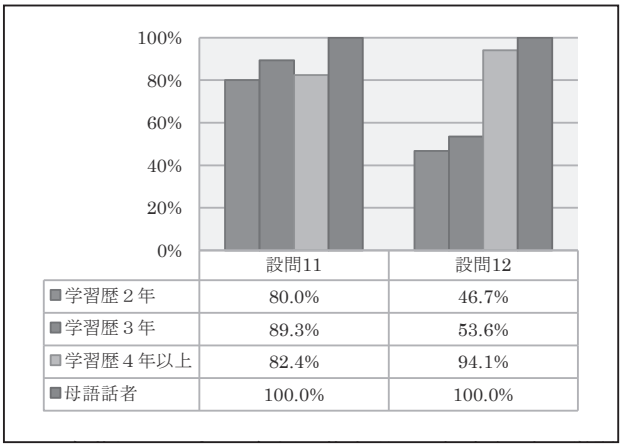
	設問１１	設問１２
滞在歴なし	87.5%	87.5%
滞在歴あり	92.3%	100.0%
母語話者	100.0%	100.0%

図22　自動詞タイプ８の無標可能表現の選択率
（日本滞在歴別）

４．４．２．日本語学習歴別

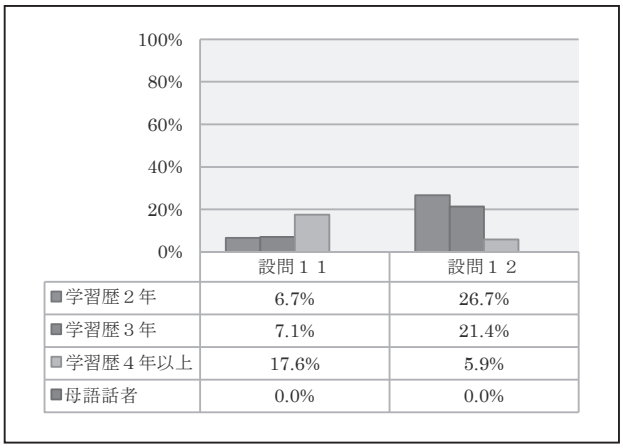
日本語学習歴別に見ると、学習歴が異なっても、設問11（「見える」）に対する中国人学習者の使用状況は大きく変わらないように見える。しかし、同じタイプに属する自動詞である設問12（「聞こえる」）においては、学習歴２年と学習歴３年の学習者の使用状況はほぼ同程度であり、学習歴４年以上の学習者グループとは大きな違いがあることが明らかになった（図23参照）。

また、図24から分るように、意志性を含む他動詞「見る」の可能形「見られる」と「聞く」の可能形「聞ける」の選択に関して、日本語母語話者の場合は選択率０％であるが、３つの中国人調査対象者のグループにおいては他動詞可能形を選ぶ学習者もいる。中国人日本語学習者は、「見える」「見られる」のいずれも「見る」の可能形式だと認識するが、両者の使い分けができないことは誤用にも繋がるだろうと考える。設問12の「聞こえられる」のような自動詞可能形の回答数（図25参照）は、学習歴２年と学習歴３年の学習者においては25%以上を占めているが、学習歴４年以上のグループには全くいないことが明らかになった。これは学習が進むにつれて、特に日本語能力試験1級試験の受験に対して準備する際（学習歴３年頃）、使用する問題集や文法解釈参考書中の「見える」や「聞こえる」の出現頻度も高くなる、つまり、学習者が問題集や参考書を通して「見える」「聞こえる」に関する練習問題や例文を多く目にすることで、そのような表現に馴染んできたからだと調査対象者向けのインタビューにより分かった。「見える」「聞こえる」の出現頻度の変化が学習者の習得に影響を与えるかに関しては稿を改めて考察したい。



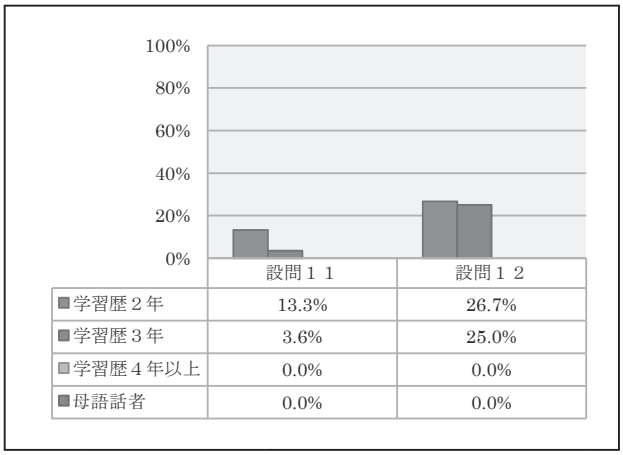
	設問11	設問12
学習歴２年	80.0%	46.7%
学習歴３年	89.3%	53.6%
学習歴４年以上	82.4%	94.1%
母語話者	100.0%	100.0%

図23　自動詞タイプ８の無標可能表現の選択率
（日本語学習歴別）



	設問１１	設問１２
学習歴２年	6.7%	26.7%
学習歴３年	7.1%	21.4%
学習歴４年以上	17.6%	5.9%
母語話者	0.0%	0.0%

図24　自動詞タイプ８の他動詞可能形の選択率
（日本語学習歴別）



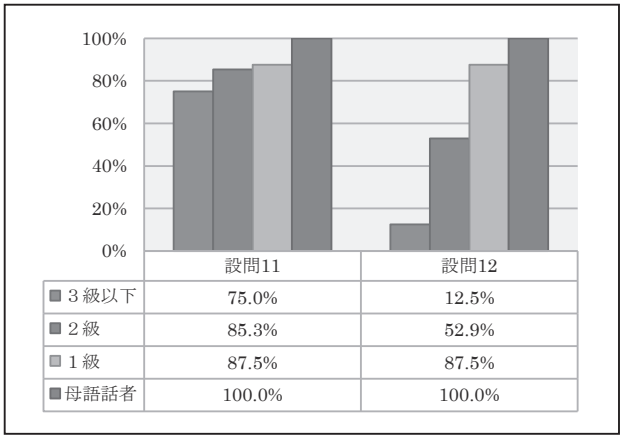
	設問１１	設問１２
学習歴２年	13.3%	26.7%
学習歴３年	3.6%	25.0%
学習歴４年以上	0.0%	0.0%
母語話者	0.0%	0.0%

図25　自動詞タイプ８の自動詞可能形の選択率
（日本語学習歴別）

4. 4. 3. 日本語能力別

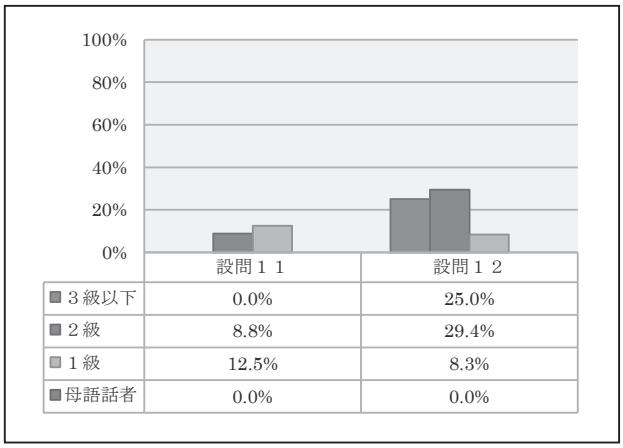
タイプ８の自動詞については、日本語能力が上がるにつれて使用状況が向上するということが図26から分かった。そして、図27により、「見る」「聞く」の他動詞可能形に関しては、３級レベル以下のグループは「見られる」（設問11）を選択した調査対象者がいない一方、「聞けない」（設問12）の選択率は25%であり、また、２級レベルの学習者の「聞けない」の選択率は「見られる」よりも20%程度高いということがわかる。つまり、同じ自動詞タイプに属する「見る」と「聞く」であっても、その使用状況においては差があるということが明らかになった。

さらに、図28に示しているように、３級以下レベルの学習者は、無標可能自動詞のかわりに自動詞可能形「見えられる」「聞こえられる」を選択する傾向がある（例えば、「聞こえられる」の選択率は62.5%に達している）。初中級レベルの学習者は「見える・聞こえる」のような自動詞に、もともと可能の意味が含まれているという意識がなく、さらに、「レル・ラレル」はどのような動詞と同時に使えるかという知識もないため、「レル・ラレル」という有標識の可能形式を無意志自動詞にも適用させてしまったと考えられる。



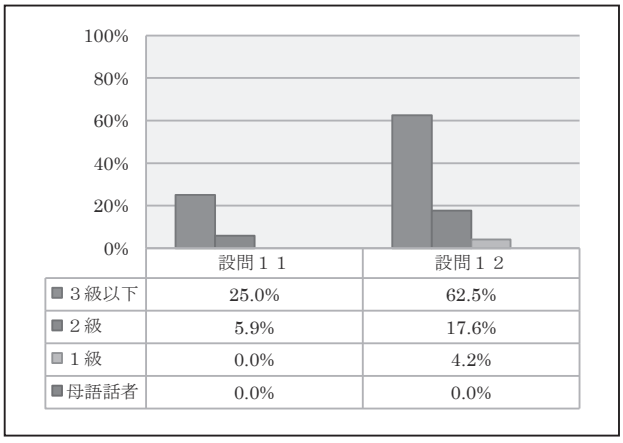
	設問11	設問12
３級以下	75.0%	12.5%
２級	85.3%	52.9%
１級	87.5%	87.5%
母語話者	100.0%	100.0%

図26　自動詞タイプ８の無標可能表現の選択率
（日本語能力別）



	設問１１	設問１２
３級以下	0.0%	25.0%
２級	8.8%	29.4%
１級	12.5%	8.3%
母語話者	0.0%	0.0%

図27　自動詞タイプ８の他動詞可能形の選択率
（日本語能力別）



	設問１１	設問１２
３級以下	25.0%	62.5%
２級	5.9%	17.6%
１級	0.0%	4.2%
母語話者	0.0%	0.0%

図28　自動詞タイプ８の自動詞可能形の選択率
（日本語能力別））

5. ま と め

本研究では、「学習環境」、「日本語学習歴」、「日本語能力」の３つの角度から、４つの無意志自動詞のタイプごとに、中国語を母語とする日本語学習者の「無標可能表現」の使用状況を考察した。その結果を簡単にまとめると、次のようになる。

まず、学習環境の違う上級日本語学習者の結果を全般的にみると、第二言語環境にいる日本語学習者は外国語環境の日本語学習者と比べて、より日本語母語話者の使用傾向に近い。４つのタイプ[25]の中で、タイプ５とタイプ８における学習者と母語話者の使用状況は殆ど同じであるのに対して、タイプ６とタイプ７においては違いが見られる。この結果は、「『可能の意味を含む自動詞』は無標識の可能表現とはいえ、一概に全ての項目の習得が難しいというわけではない」（p.159）という封（2005）による結果を支持している。また、結果可能表現（タイプ７）の使用傾向に関しては、小林（1996）、封（2005）などの先行研究で指摘されたように、日本語母語話者が「無標可能自動詞」を多用するのに対して、中国人日本語学習者は「レル・ラレル」形を多く使用することが本研究にも見られた。特に、「出られない」のような無意志自動詞可能形の使用は日本語母語話者には全くないが、中国人日本語学習者には少なくないことが本研究から分かった。さらに、「レル・ラレル」形を多用するといっても、第二言語環境における中国人日本語学習者は自動詞可能形を好むのに対し、外国語環境の学習者は他動詞可能形を好む傾向[26]があるのではないかと本調査の結果から予想できる。

今回は外国語環境における中国人日本語学習者のみを対象に「日本語学習歴」と「日本語能力」の２つの側面から無標可能表現の使用状況を調べた。その結果として次の３点が明らかになった。①外国語環境にいる日本語学習者の使用傾向には日本語母語話者の使用傾向と大きな違いがあり、特にタイプ７の全般とタイプ６の設問10の「受からない」においてはかなりの違いがあった。②日本語学習歴が伸びるまたは日本語能力が上がるにつれて、無標可能表現の使用率がタイプ５・８のように高くなる自動詞もあれば、タイプ６・７のようにそうでもない自動詞もある。特に学習歴３年のグループと日本語２級の中級後半の学習者グループは無標可能表現の使用にU字型のように後退する現象があった。③日本語学習歴が伸びるまたは日本語能力が上がるにつれて、無意志自動詞の可能形の使用が徐々に減っていた。

今後の課題としては、まず、学習環境と言語能力の相互作用が言語習得に影響を与える[27]という観点から、初級・中級レベルの中国人日本語学習者の「無標可能表現」の使用傾向は学習環境によって異なるか、また、「可能」「不可能」の場面設定により中国人日本語学習者の「無標可能表現」に対する使用傾向は異なるか、といったことを明らかにする必要がある。さらに、今までの自動詞可能表現の研究において、使用傾向を対象とする横断的な研究は多数あるものの、縦断的に学習者の習得プロセスをより深く掘り出した研究はほとんど見られない。よって、中国人日本語学習者の自動詞可能表現の習得プロセスにおける縦断的な研究にも取り組む余地がある。

注釈

[1] 筆者自身の学習体験に加え、封（2005），小林（1996），関（2013）などの先行研究にもよる。

[2] 現代日本語の可能表現は形態的に分類すれば、「有標識の可能表現」と「無標識の可能表現」の２種類に分けられる。（張 1998：256）

[3]「結果可能表現」とは、「動作主がある出来事またはある種の状態変化を実現しようとして動作を行う場合、動作が行われた後､主体的または客体的条件によって、動作主の意図が思い通りに実現することができるかできないかを表す表現である。」（張 1998：253）

[4]「有対自動詞・無対自動詞」について早津（1987：80–82）は以下のように定義している。日本語の動詞には自動詞と他動詞が形態的・意義的・統語的に対応するものもあれば、対応しないものもある。その対応し合う動詞（例：開く―開ける）は「有対自動詞、有対他動詞」と呼ばれ、その対応し合わない動詞または対応する動詞を持たない場合（例：吹く、食べる）は「無対自動詞、無対他動詞」と呼ばれる。

[5]「有対自動詞のル形または「―ナイ」の形は日本語の結果可能表現の形式の上でもっとも基本的な条件である。」（張 1998：257）

[6]「無標識の可能表現（即ち結果可能表現）」という表現が見られる。（張 1998：252）

[7] 遅（2014：84）で取り上げられた無標識可能文を判定する基準は、以下の２点の何れかである。

基準①：「レル・ラレル」や「デキル」という可能形式が伴う有標識可能文と交換できれば、無標識可能文として判定する。

例：毎日適量に運動して、規則的、バランスよく食事を取れば、きっと痩せる。
（=痩せることができる）

基準②：「とうてい・とても・なかなか・どうしても」の何れかの副詞と共起すれば、無標識可能文

と判定する。肯定形式の構文に対して、同じ文脈環境で否定表現に変えて、「基準２」を満たせば、無標識可能文と判定する。［例文（２ａ），（２ｂ）］

例（1）：私は足がプールの底に（とうてい・なかなか・どうしても）つかない。

例（2）：ａ．手が天井に届く。

ｂ．手が天井に（とうてい・なかなか・どうしても）届かない。

[8]「他動性」について庵（2012：100）は「動作主から対象へ及ぼされる影響のこと」と定義している。

[9] 青木（1997）、長友（1997）、都築（2001）

[10]「慣らす」（松村 2006：1898）

①繰り返し接してなじむようにする。なれさせる。順応させる。

「体を寒さに―・す」「何度も英会話のテープを聞いて耳を―・す」

②なれすぎて無遠慮に扱う。〔「慣れる」に対する他動詞〕

「人をも―・さず人にも―・されず」

[11]「見える・聞こえる」は「典型的な有対自動詞とみなすには多少疑問が残る」（早津1987：84）と言われているが、関（2014）のほか、早津（1987）、長友（1997）、加藤（1999）、松岡（2000）、張（1998）などの先行研究では「見える・聞こえる」を有対自動詞として扱っているため、本稿でも先述した先行研究に従うことにする。

[12] 封（2005）の実際のテストで用いられた調査文は以下のようである。

门怎么也打不开。

→ドアをあけようとしても、なかなか_____。

[13]『新編日語２』（上海外語教育出版社）は五段動詞がどのように「レラ・ラレル」と共起されるかについて次のように述べた。「五段动词未然形后续「れる」，不过，一般都用約音，即将動詞未然形「あ段」假名約音成該行「え段」假名。」（p. 181）つまり、「あく」の未然形は「れる」と共起されると「あかれる」となり、さらに未然形の「あか」の「か」と「れる」の「れ」を約音して、同行の「け」になるため、「あかれる」は「あける」に変えられると述べている。例えば、「読む」―「読まれる」―「読める」。

[14] 学習環境と言語能力の相互作用について、孫（2008）、Brecht, Davidson & Ginsberg（1995）などの先行研究がある。

[15] 関（2014）の分類表に挙げられた自動詞例は限られるため、筆者が関（2014）の分類表にない「咲く」（呂 2006：56）・「痩せる」（遅 2014：27）・「出る」「入る」「つく」（セーリム2014：53）・「治る」（王 2012：10）・「動く」（龐 1999：53）の７つの自動詞を加え、予備調査を通して20名の日本語母語話者の確認を得た上で、本稿のテスト問題を作成した。

[16] 日本語能力試験 JLPT（国際交流基金と日本国際教育支援協会主催）

[17] 関（2014）による自・他動詞の分類（p.52表１参照）は自他対応の有無などにも言及したが、本研究は４つの非意志自動詞タイプの意味機能に焦点を当てて分析するため、ここでは意味機能だけを表に挙げる。

[18] 日本滞在歴なしの対象者は24名で、滞在歴のある対象者は26名である。

[19]「毎日適量に運動して、規則的、バランスよく食事を取れれば、きっと痩せる」（遅 2014：27）

[20] 小林（1996）、封（2005）、王（2012）など

[21] 設問５における「自動詞可能形」と「他動詞可能形」の選択率が同じであるため、設問数を数える際にはこれらを除いた。

[22] 注20参照

[23] 今回の調査に設問数は限られており、統計的な手法も使っていないため、この傾向については稿を改めてさらに検討する必要がある。

[24] 第二言語の規則を拡大して例外などにも適用した結果生じた誤用。（高見澤他 2004：194）

[25] 関（2014）の自・他動詞分類表（p.52表１参照）における「タイプ５」「タイプ６」「タイプ７」「タイプ８」を指す。

[26] 注22参照

[27] 学習環境と言語能力の相互作用について、孫（2008）、Brecht, Davidson & Ginsberg（1995）などの先行研究がある。

参考文献

日本語文献

青木ひろみ（1997）「《可能》における自動詞の形態的分類と特徴」『言語科学研究』３，pp.11-26

庵功雄（2012）『新しい日本語学入門―ことばのしくみを考える―』第２版 スリーエーネットワーク

王恰韓（2012）「中国人学習者における日本語無標可能表現の習得に関する研究：この役はあの新人俳優にはつとまらない」『日本語研究』32，pp.1-14

加藤由紀子・後藤規子・六郷明美（1999）「形態的に対立する自動詞と他動詞の位置関係」『岐阜大学留学生センター紀要（創刊号）』pp.20-30

楠本徹也（2009）「無標可能表現に関する一考察」『東京外国語大学論集』79，pp.65-85
楠本徹也（2014）「有対自動詞可能構文における意味的組成関係―他動詞有標可能構文との比較において―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』40，pp.103-111
小林典子（1996）「相対自動詞による結果・状態の表現―日本語学習者の使用状況―」『文藝言語研究言語篇』29，pp.41-56
周国龍（2013）「何故日本語は曖昧だと思われるのか―可能表現に関する日中対照の視点から―」『鈴鹿国際大学紀要』pp.9-20
セーリム，パンニー（2012）「タイ語を母語とする日本語学習者の「自動詞の可能形」誤用に関する一考察―行為の結果の状態の表現を中心に―」『日本語日本文化研究』22，pp.185-198
セーリム，パンニー（2013）「『自動詞の可能形』の誤用の要因に関する考察:初級日本語教科書の分析から」『日本語・日本文化研究』23，pp.118-128
セーリム，パンニー（2014）「日本語母語話者にみる行為の結果を表す表現の使用傾向：実現可能場面における自動詞と他動詞の可能形」『日本語・日本文化研究』24，pp.48-58
関承（2013）「中国語母語話者における日本語可能表現の習得について―無対動詞の有・無標識可能表現に着目して―」『国際協力研究誌』20（1），pp.21-30
関承（2014）「中国語母語話者における日本語自・他動詞の習得研究―中国語で可能標識が使われる表現を中心に―」広島大学大学院博士論文
孫愛維（2008）「第二言語及び外国語としての日本語学習者における非現場指示の習得―台湾人の日本語学習者を対象に―」『世界の日本語教育』18，pp.163-184
高橋太郎・金子尚一・金田章宏・齋美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈（2013）『日本語の文法』ひつじ書房
高見澤孟・ハント蔭山裕子・池田悠子・伊藤博文・西川寿美・恩村由香子（2004）『新・はじめての日本語教育―基本用語事典―』アクス出版
遅皎潔（2014）「無標識可能文の性質について」『文化』78（１・２），東北大学文学会，pp.26-46
張威（1998）『結果可能表現の研究―日本語・中国語対照研究の立場から』くろしお出版
張岩紅（2008）「日中対照研究から見る可能表現―『見える、見られる、見ることができる』」『日本語と中国語の可能表現』白帝社，pp.53-87
都築順子（2001）「日本語の「可能の意味を含む自動詞」に関する一考察―中国語との比較対照において―」『日本文化論叢：第２回日中文化教育研究フォーラム報告書』大連理工大学出版社，pp.221-235
長友文子（1997）「可能形の規則による動詞の分類―日本語教育から見た可能表現の研究（一）―」『和歌山大学教育学部紀要』47，pp.1-8
日本語教育学会（編）（2005）『日本語教育事典』 大修館書店
早津恵美子（1987）「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』6,pp.79-09
龐黔林（1999）「日中両国語の可能表現について―自動詞の可能表現を中心に―」『神戸女学院大学論集』pp.43-59
封小芹（2005）「可能の意味を含む有対自動詞の産出的能力の習得：中国語を母語とする学習者を対象した調査に基づいて」『ことばの科学』18，pp.143-162
松岡弘（監修）、庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（著）（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
松村明（2006）『大辞林 第３版』三省堂
姚艶玲（2008）「〈不可能〉の言語化に関する日中両語の対照研究」『日本語と中国語の可能表現』白帝社，pp.88-110
楊彩紅（2007）「可能の意味を持つ日本語自動詞の習得―中国語話者と韓国語話者を比較して―」『言語と文化』1，pp.51-71
呂雷寧（2006）「使用範囲から見た日中両言語の可能表現」『ことばの科学』，pp.53-66
呂雷寧（2008）「無意志自動詞の可能表現に関わる要因の分析―意志性･主体性･実態の性質を中心に―」『言葉と文化』９，pp.271-286
呂雷寧（2011）「日本語における非情物の可能表現について：自動詞を中心に」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』41，pp.201-213

英語文献

Brecht, R. Davidson, D. & Ginsberg, R.（1995）Predicting and measuring language gains in study abroad settings. In B.Freed（Ed.），*Second language acquisition in a study abroad context*（pp.37-66）.Amsterdam/Philadelphia,John Benjamins

資料

有標・無標可能表現テスト問題

４つの選択肢から１番適切だと思われるものを１つ選んでください。

（＊　Dを選ばれた場合、正しいと思われる答えを線の所に書いてください。）

単語：歯磨き粉（牙膏）　…てから（…然后…以后）
スープ（汤）　ダイエット（减肥）
入試（入学考试）　一生懸命（拼命，努力）
耳栓（隔音耳塞）　快晴（天气晴朗）

1．歯磨き粉を出そうとしているが、どうしても____。

A．出ない　B．出せない
C．出られない　D．どれも不可_____
訳文：_____

2．「困ったなあ、本を入れようとしているけど、カバンが小さすぎて、____。」

A．本が入れられない　B．本が入れない
C．本が入らない　D．どれも不可_____
訳文：_____

3．ドアは壊れてしまったようで、どうしても____。

A．開かない　B．開けられない
C．開けない　D．どれも不可____
訳文：_____

4．母：ちゃんと病院に行かないと、あなたの病気は____よ。
私：はいはい！仕事が終わってからすぐいくよ。

A．治せない　B．治れない
C．治らない　D．どれも不可____
訳文：_____

5．行きたいが、お金がないので、なかなか____。

A．決心がつけられない　B．決心がつけない
C．決心がつかない　D．どれも不可____
訳文：_____

6．停電で工場の機械は____。

A．動けない　B．動かない
C．動かせない　D．どれも不可____
訳文：_____

7．辞書を引かないと、単語の意味はほとんど____。

A．分かられない　B．分からない
C．分けられない　D．どれも不可____
訳文：_____

8．どんなに長く住んでいても、ここの生活には____。

A．慣れない　B．慣らせない
C．慣れられない　D．どれも不可____
訳文：_____

9．７日間脂肪燃焼スープダイエットであなたは本当に____のか？

A．痩せられる　B．痩せる
C．痩せれる　D．どれも不可____
訳文：_____

10．入試まで後３カ月しかないので、一生懸命勉強しなかったら、いい大学に____よ。

A．受けられない　B．受からない
C．受かられない　D．どれも不可____
訳文：_____

11. 泊まっているホテルから福岡タワーが____。

A．見られる　　B．見える
C．見えられる　　D．どれも不可____
訳文：_____

12. 騒音で集中できないので、耳栓をして何も____ようにしている。

A．聞こえない　　B．聞けない
C．聞こえられない　　D．どれも不可____
訳文：_____

13. 明日は快晴だそうで、たぶん強風は____。

A．吹かない　　B．吹けない
C．吹かれない　　D．どれも不可____
訳文：_____

14. 天気予報によると、雨は____そうです。

A．降られない　　B．降れない
C．降らない　　D．どれも不可____
訳文：_____

15. ここの桜は４月になると____。

A．咲ける　　B．咲く
C．咲かれる　　D．どれも不可____
訳文：_____

Usage of Japanese “unmarked” potential expressions by Chinese learners of Japanese

Shi Yihan

Abstract

This paper reports on the use of Japanese “unmarked” potential expressions by Chinese learners of Japanese from three perspectives:learning environment, learning history and Japanese proficiency. The following conclusions were drawn. First, the usage tendency of learners in a second language environment is closer to that of a Japanese native speaker than learners in a foreign language environment. Second, while Japanese native speakers frequently use “unmarked” potential expressions in non-volitional intransitive verbs, it isclear that Chinese learners often use marked potential expressions for Type 7 (result-potential expression) non-volitional intransitive verbs. Third, the form “non-volitional intransitive verb + marked potential expressions” found in words such as “de-rare- (nai) (出られ (ない))” tends to be used by Chinese learners, even thoughJapanese native speakers don’ t employ it at all.

This paper also investigatesthe use of “unmarked” potential expressions with regards to the “Japanese learning history” and “Japanese proficiency” of Chinese learners of Japanesein a foreign language environment. As the amount of time spent studying Japanese increasesand languageproficiency improves, the rate of using “unmarked” potential expressions increasefor some non-volitional intransitive verbs, such as Type 5 (natural phenomenon) and Type 8 (perceive ability) . Conversely,the same pattern were not evident fornon-volitional intransitive verbs such as Type 6 (human condition) and Type 7 (result-potential expression) . There arealso cases of regression in the use of “unmarked” potential expressions for some learner groups, such as people who have 3 years of language learning experience, as well as those studying who have acquired mid-level linguistic ability (N2) .